

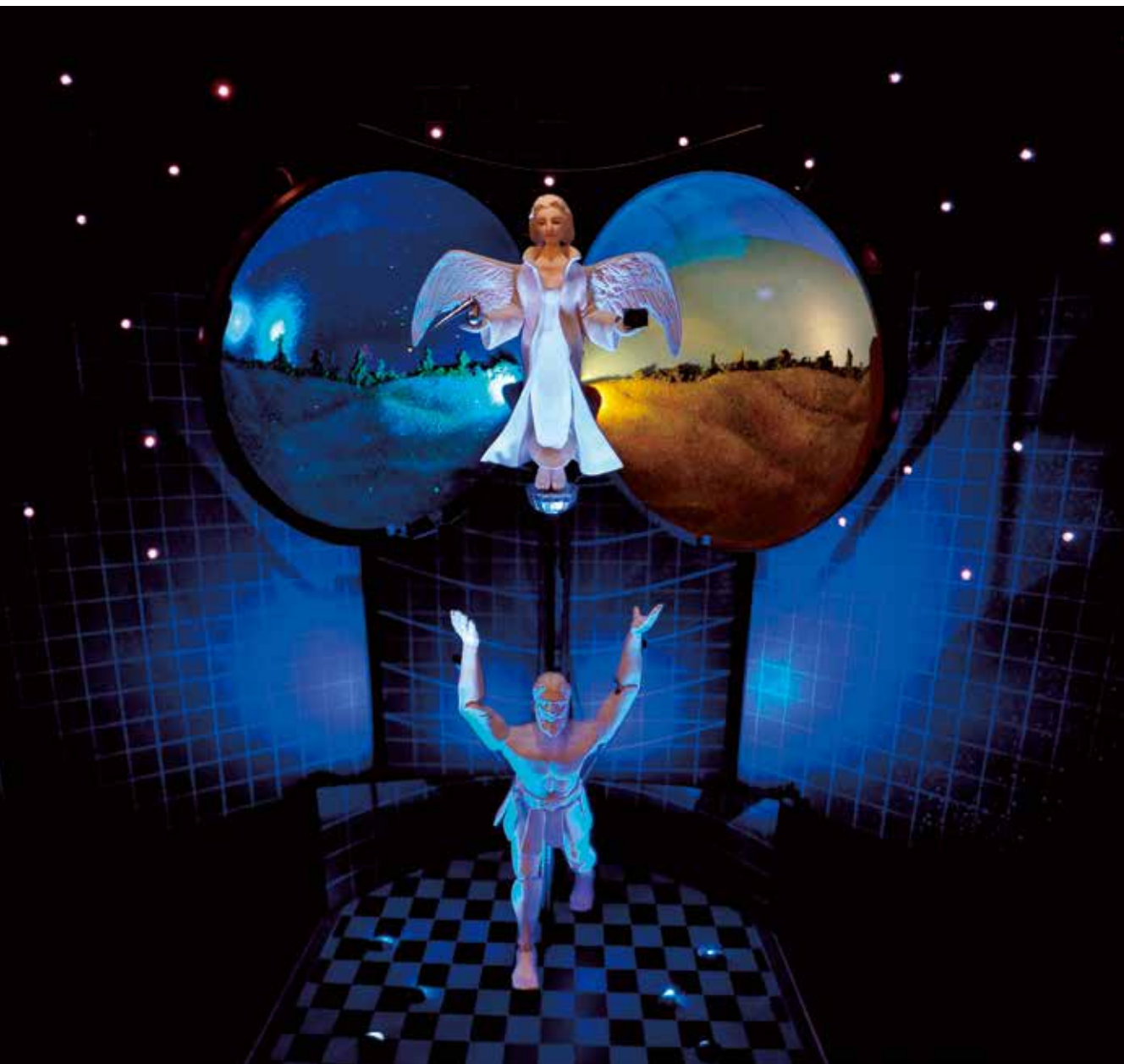
No. 65

2017.3

世田谷文学館 ニュース

SETAGAYA LITERARY MUSEUM

館長の作家対談
柴田翔（作家）



ムットーニ《アトラスの回想》(中原中也「地極の天使」より) 2015年

特集 世田谷文学館全館改修工事とリオープン
2015(平成27)年度の収蔵品について

館長の作家対談

ゲスト
柴田 翔
(作家)

聞き手
菅野昭正
(世田谷文学館館長)

学生運動の時代を背景にした青春群像劇の傑作『されど われらが日々―』から約半世紀。30年ぶりの長篇小説『地蔵千年、花百年』を発表された柴田翔さんをお招きして、当館館長がお話を伺いました。

570枚の大作『地蔵千年、花百年』

菅野▼今日は忙しいところ、おいでいただきまして、どうもありがとうございます。この「季刊文科」第69号に掲載された『地蔵千年、花百年』、久しぶりの柴田さんの大作を読んで、掛け値なしに久しぶりに日本語で小説らしい小説を読んだという感想を持ちました。とても興味深く、また教えられるところが多々あつて、柴田

さんにとつても大変いい仕事をされて、記念碑的作品になったのではないかと慶賀しています。600枚ぐらいいになりますか。

柴田▼長くなつたなと思つてはいましたが、表紙に570枚とあるのを見て、そんなになつたのかと驚きました。

菅野▼時間としてはどれくらいかけられたのですか。

柴田▼結局1年半くらいでしょうか。短篇のつも

菅野▼吉祥寺駅の北口ですか。

柴田▼30代に書いたのかな。実際にその店があるわけじゃないけれど、下駄屋の話です。店の奥に主人が座っているけれど、みんな靴しか買わなくなつて、寂れている。その主人が戦争に行った経験があつて、戦地でどうも悪いことをした。でも、今になつてみると、みな結局は過ぎたことだなあと思ひながら寂れた店の奥で人通りを見ている。ただ、そういうことをした人が、本当にそれだけで済むもののかな、という疑問も残つていて、いつかそれを書くかなと思つていた。

菅野▼今度の『地蔵千年、花百年』でも、戦時中にゲリラを斬つたかも知れない人物が登場しますね。

柴田▼やつたかやらなかつたかも分からない。でもやつぱり自分のやつたことと無関係には生きられない。自分にも分からない不可解さの中で生きている。人間はそれくらい曖昧になる。そして、主人公はそれに衝撃を受ける。

年表の呪縛から離れた

柴田▼『地蔵千年、花百年』には、主人公のなじみの歯医者さんが出てくるでしょう。

菅野▼ええ、湯之村^{ゆのむら}歯科ですね。

柴田▼初めは彼の人間関係を先輩やら後輩やら具体的に書いていて、一方で年代を気にしていません。何年生まれの奴がいつ、どうしてというようなことです。そうすると、面倒な話になつて、年表を作つていた。でも、急に、人間つて年表の中で生きているものかなつていう気がしてきたんです。普通、何年に何をやって、その時世界はどうだつたなんて、誰もあまり考えないでしょう。年表で辻褄を合わせていたのは何か違うなという気がして。それでふと歯医者^{しやいさ}の先輩後輩の関係など一切要らないと思ひ当たつたんです。そこには、或る人生を持つている一人の歯医者さえないればいい。

菅野▼それで先輩後輩という話題は、実際にはお



書きになつたのですか。

柴田▼けっこう書いたんです。

菅野▼捨てたわけですね。

柴田▼書いていて面白くないんですよ。それが年表の問題とも関係していて、ふと思ひついて、歯科医一人だけを残して、先輩も後輩も消えてもらつた。そうしたら、年表は基本的にはあるけれども、辻褄が合うかなんてことは抜きにして、自由に書けるようになった。

菅野▼この小説は一言で言う、主人公・加見直行^{かみなおゆき}の生涯の物語ですね。この主人公は、60年安保の

りで書き出したのですが、書いているうちに書きたいことの性質が変わり、長くなりました。初めは長き以前に、どういうタイプの小説に行き着くのか自分でもよく分かつていなかった。ごく普通のリアリズム小説として書き始めたのですけれども、いやちよつと違ふなつていう感じがしてきたですね。完成まで、せかさず、待つていてくれた鳥影社に感謝しています。

菅野▼初めの短篇30枚を書くという時の中身

時代、それから70年代前半の過激派が崩壊していく時代、そういう時代の知識人に突きつけられていく問題を、ある距離を置いて、しかしそれなりに考えている人物ですね。そういう気配がずつと底流している感触は濃厚にある。

柴田さんの小説についての考え方の中に、「時代の中で生きていく個人」という問題が基本にある。ただし、それを年表との対応で、年代順に図式的に書いていくのは面白くないという考えが、どこかで働いているのじゃないかなという感じがするのね。年代をそのまま追つていくと、人物た

は、この小説の序章の「夕暮れる商店街」の話と同じですか。

柴田▼ええ。商店街のスケッチです。

菅野▼戦後、次第に復興していく時代ですね。

柴田▼復興というよりは、いろいろな人々の生きる商店街の話を書きたかつた。若い頃書いた吉祥寺をモデルにした商店街の話があり、あれはもうちよつと書けるんじゃないかという気分が、ずつと残つていて。吉祥寺に商店街があるでしょう。

ちが時間に追われて生きていくような形になつて、小説として平板なものになつてしまふのじゃないかという危惧が働いたんじゃないか。これは僕の勝手な推測ですが。柴田さんのこれまでの小説と異質に感じるのは、時間の構成の仕方ですね。随分複雑になつていて。1回読んだだけでは、なかなか時間の前後が組み立てられない。時間構成を読者が組み立てるというのは、それもまた小説を読む一つの楽しみなのです。例えば、主人公が南の国へ渡ります。そこで、グレイティナという女性と恋をして暮らす。あれはだいたい昭和30年代後半ぐらいいのかな。

柴田▼そうですね。主人公が大学院を終わつて4年間ですね。

菅野▼その話題はかなり小説が進行してから出てくるでしょう。小説の最初の時点からすれば、かなり過去へ遡るわけですね。ほかにそういう時間を交錯させるところがいくつもある。それが初めからのプランでそうなつていいのか、あるいは自然にそういう構成になつていったのか。そういう時間の処理の仕方が巧みになつていて、小説の容量を膨らませる大きな要因なのではないかと思つたりもしました。

柴田▼年代順に書いて行くと、すべてが原因と結果みたになつて、人物が瞬間を自由に生きられない。ただ、年代が飛ぶと、読む方は面倒くさくならないかなという心配はありました。今度書き上がつて、たまたま出会つた人に、それが邪魔にならなかつたか、聞いてみたら、いや、読んでいて、ああ、あれはこうつながるのかと辿つて行つて、むしろそれが楽しかつたと言つてくれたので、少し安心しました。

菅野▼邪魔というのはどういうことですか。

柴田▼この小説では、主人公がいきなり外国から帰つてきた。自分の意思によらずに帰つてきた。それしか書いていないわけですよ。かなり先にいつて、ようやくどこから、何故かが分かつてくるわけですが、そこをつなげるのは読む方にとつてけっこう面倒かなと実は恐れていました。

菅野▼僕も面倒だなどとは感じませんでしたね。そして実に多面的というか、視野の広い小説ですね。

柴田▼そう言っていたけると嬉しいですね。

菅野▼例えば、戦後の日本社会の変遷です。商店街の書き方にしても、戦後の復興の時代というのを彷彿とさせているところがあるし、それから個人商店が衰退して駅ビルに吸収されたりということがありますね。日本の社会風俗の変化をよく捉えている一方、学生運動のことは直接には出てこないけれども、加見直行が南の国へ行き、そして帰ってきて貿易商になった。

そういう彼の一生を決定しているのは、山の温泉宿で沖神介という人物に出会ったことですね。沖という人物は、実は過激派のリーダーだった人物ですが。凡庸な小説だと、沖がもつと派手に演説をして、それにアジられて加見は行くのだらうけれど、二人の出会いで何があつたのかは曖昧で、それが僕はとてもいいと思ったんですね。何となく沖の生き方から何かを感じ取った。しかも彼に促されて加見が南の国に行く時、あまり深く考えずに行くという感じもあるじゃないですか（笑）。人生って場合によって非常に茫漠とした偶然に左右されながら、しかしそれが人生を決定してしまうことがある。あそこが一つの山場で、どう書くかによって、小説の全体がガラッと変わってしまふと思うんですね。そこをうまく処理されたことが大きな要になっている。あれが大事なところですね。

柴田▼彼（主人公の加見）にとってああいふ出会いがあるのは彼の人生の必然なのです。技術屋として生きていくのは、もはやあり得なくなっていて、でも、それしか道がないという場合ってありますよね。そういう時に、たまたまああいう男（沖）が現われて、決して沖が彼を誘っているわけじゃなくて、彼の方がそのチャンスを捉える。実際の人生じゃそういう機会はなかなか来ないけど、この小説の中では、機会は来るべくして来る。機会が欲しかったけど、それがなくて一生つ

へ行く。そのあたりの描写がとても大事な山場だと思ふのだけれど、茫漠としているところが、小説全体の格好としてかえっている。柴田▼年表の呪縛から離れ、歯科医師の先輩を追放しちゃった。それでこも「あ、これでいいんだ」と思えた。一年半くらい書いたけれど、その点が決定的なターニングポイントだったという気がしています。菅野▼「これでいいんだ」というのは、ドイツの小説は分からないけれど、フランスの小説だと、今おっしゃったような書き方をしないですね。もつと論理的に突き詰めて、主人公はこういう内的な思考を経て、それでこう変わっていくと書くと思うのですよ。今おっしゃった書き方と、時間の交錯の仕方は、批評家の言い方をして申し訳ないけれど、新しい手法がごく自然に実践されたのか、あるいは意識的に時間の処理に手数をかけられたのか



柴田▼菅野さんにそう言っていたとくと感激します。いわゆるリアリズム小説的な書き方はやめようと思つたんですね。リアリズムの方から言えば、何で登場する人物がうまい具合にいろいろ出会うんだという話になりますけれど、小説ではそういうふうに出会つたつていいじゃないか、そちらの方に人生の本質は現わ

ある時期から、日本の小説は人間像の解体とか、自我の崩壊とか観念的な命題が先に立って、それに操られるようになる、あるいは引きずられるようになる傾向がかなり目立つようになってきていますけれど、それに敢然として立ち向かったのか、どこの人物をとつても、非常にきちんとはつきりその人物像が浮かんでくるように書かれているのですね。人間をきちんと書くという筆力と熟達が、柴田さんに備わっているのがよく分かりました。

様々な人物像の細部が非常にしつかりしているのも大事なことになりますね。

小説の神は細部に宿る

菅野▼僕のかねがねの自説として、小説の神は細部に宿ると考えているんです。どんな重々しい、立派な主題を扱つても、細部がうまく組み合わさらないければ、決して名作にはならない。例えばドストエフスキーを読んでいると、細部は一見、随分乱暴に書いているように見えるけれど、結局うまく全体とのバランスが取れているのです。そう考えると、『地蔵千年、花百年』では、商店街の

か分かりませんが、結果として重層的な厚みを感じさせるものになっています。

柴田▼嬉しかったですね、あの沖と若き加見の出会いの場面が書けた時は。人間はみな、瞬間に生きる。途中から姿を消した歯医者先の先輩には悪いけど、彼が消えたおかげです（笑）。



まらぬ人生を送つたという、そういう小説だつてあり得るわけですね。だけど僕は、いつかどこかで機会は現われて、別の未来が開けるという世界を書きたかった。今までのリアリズム小説だと、そんなに話がうまくいくわけがないというふうになるけれど。

菅野▼主人公が辿る経路を追うだけで、何が彼の運命を決定したか、それとなく埋め込むだけで済ませる小説とは、そのあたりが際立って違うのが見事です。ところで、彼（加見）は工学の大学院ですね。

柴田▼ええ、工学の大学院修士を出て。

菅野▼そういうものにある種の限界を感じていたところ、たまたま沖と出会つた。小説の常套手段だと、エンジニアとしての生涯に見切りをつけた彼が、この人物の勧める南の国はどういうところであるかということを確認かめた上で行くことにする。単純といえば単純、しかし、論理的に筋が通つているといえれば筋が通つているというふうな転身の仕方をするような書き方をするんじゃないか。そこがそうじゃないところに新鮮な意外さがある。今お話を聞いてよく分かるけれど、要するに偶然が必然に転換するんですよ。

柴田▼ええ。偶然を必然に転化するのは、本人の直感です。自分を呼ぶ声を瞬間に信じる。菅野▼とにかく、主人公は南の国

れる。そういう気がしたんです。そう思つた時、書くのがずつと楽しくなりましたね。

菅野▼いいですね。羨ましい話だな。楽しく書いて立派な小説になるんですから。

柴田▼だけれど、読者が受け入れてくれるかは、最後まで確信がないところもありました。

菅野▼日本の小説のある部分で、ある時期からいろいろな新しき、例えばヌーヴォー・ロマンが流行つたとか、ラテンアメリカのマジックリアリズムがどうとか、複雑な時間構成にしても空間転換にしても、それから同時性の技法とか、いろいろな方法、技法を意識するようになりましたね。しかし、それになかなか伴わないというのが今の実態だと思ふけれど、そういう技法の何から学んで使つてみるということを皆やつていると思うのですよね。そういう傾向があるから柴田さんの小説も、一般の読者にとつても読みやすくはなつていっていると思うんですね。

若き日の出会いを記念して

菅野▼ひとつ気になつていたのは、主人公を南米へなぜ行かせたのかという事です。結局、国名は出てきませんよね。

柴田▼ええ。出てこない。

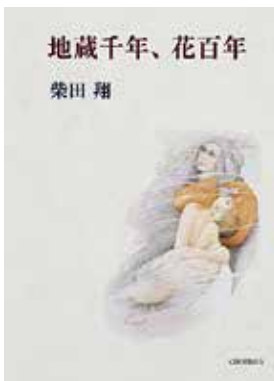
菅野▼あれはわざと出さないんですね（笑）。

柴田▼もちろんですよ（笑）。菅野▼全くの架空の空間として書かれています。なぜ南米かということですね。

柴田▼作者の僕の生活とおよそ遠いところにしてよと思つたのです。僕はドイツ関係が一応専門なので、ヨーロッパだと具体的にどこだという話になるでしょう（笑）。更に、先進国対後進国とかいう話にもなる。それがいやだった。今回は、現実の歴史ではなく、人



『季刊文庫』第69号
(2016年8月、鳥影社)



『地蔵千年、花百年』
(2017年3月予定、鳥影社)



新装版『されど われらが日々―』
(2007年11月、文芸文庫)



ゲート『ファウスト』上
(2003年1月、講談社文芸文庫)

の1回限りの生を書きたかった。で、何も知らない南米に、更に架空の国をつくつてみた。後ろの大きな山脈によって、南米全体からも切り離されている場所という架空の設定です。南米だけでなく北半球で、要するにどこでもない場所をつくりたかった。そういうところに、運命の力でふと行つちやつて幸せな4年間を過ごす。

個人的な話ですが、僕は若い時に留学して、たいへん得したと思つています。自分が生まれ育つた日本という国も、もちろん自分の人生に大きな影響を与えたけれど、それ以外の世界を経験したのは貴重でした。それを主人公にも4年間経験させたかった。

菅野▼中南米というのは、今でも反米闘争で革命的なゲリラ活動が盛んにあるわけですね。そういうこともあって、南米にしたということなんです。

◎北杜夫資料◎

寄贈者：齋藤喜美子（491点）
寄贈品：北杜夫『幽霊』『楡家の人びと』『どくとるマンボウ昆虫記』『茂吉あれこれ』（茂吉評伝4部作）ほか主要原稿、マブゼ共和国関連資料、諸家書簡など



北杜夫『楡家の人びと』原稿、執筆のための資料

◎石井立 旧蔵資料◎

寄贈者：石井耕、石井牧、平賀美穂（330点）
寄贈品：戦前・戦時下の中野重治原稿、堀文子《『壺井栄作品集』挿絵原画》、諸家原稿、書簡など



中野重治『第一章』原稿 1935年発表 「転向」を条件に出獄した直後に執筆



堀文子《『壺井栄作品集』挿絵原画》1956-58年頃 紙・墨・銀泥



北杜夫あて川端康成書簡 1966年12月6日 『白きたおやかな峰』献本礼状



北杜夫書画「ほそぼそと唐松立ちてあたりけりわが歩む道は静かなるかも」

マブゼ共和国紙幣



◎植草甚一書簡◎

寄贈者：関口 展
寄贈品：タイガー立石あてはがき（2点）



立石紘一（タイガー立石）あて植草甚一はがき 1968年5月4日



2015（平成27）年度の収蔵品について

昨年度に収集した収蔵品830点は、皆様からのご寄贈によるものです。ご協力に感謝申し上げます。
（ここでは主な収蔵品をご紹介します。）
（敬称略、順不同）

柴田▼いや、そうではなくて、むしろ一種のユートピア、どこにもないところを設定していました。ただ物語が進むにつれ、中南米の現実の矛盾が物語に浸透してくるのを完全に防ぐことはできなくて、ひいき目に見れば、それがまた物語に活気を与えた気もしています。

菅野▼加見が亡くなる前、日本の左翼の情報誌と称するものを読んで、沖の死を知りますね。ああいう場面は、書いているうちに思いつくわけですか。

柴田▼予め考えていたわけじゃないです。ただ、主人公にとって接触の機会は少なかったけれど、決定的な人物（沖）がどうなったかということは、小説の中で一応ケリをつけておきたいなっていう気分がありました。しかしまた、それによつて同時に、モデルという意味ではまったくないのだけど、若い自分が会った人たちの記念碑も立てたかった。例えば菅野さんも個人的にご存じだったのでしょうか、一昨年亡くなった沖浦和光（註1）さん。

菅野▼ええ、沖浦さん。学生の時から知っていました。学生時分、学友会（学部の自治会）に言われて、フランスのレジスタンスの詩の話をしたことがあるんです。聴衆は5人ぐらいしかいなかったけれど（笑）。その時に沖浦さんがいて僕ことは覚えていたらしい。それからずっと経つてから、野間宏さんの『青年の環』が完結して、出版記念会で彼が出席していて覚えていてくれたのね。「あの時のあんだだな」みたいな感じで（笑）。

柴田▼（笑）あの世代の人たち、特に僕が親しくしてもらったのは安東仁兵衛（註2）、通称アンジンでした。意



見は殆ど一致しなかったけれど、アンジンや沖浦さんの持っていた人間的魅力が忘れられない。もちろん、党派の闘争の中で、彼らの別の姿を記憶している人たちもあるだろうけど、僕は今でも、自分が若い時にああいう人たちに接しえたのは運命の贈り物だったと思つて、感謝しています。その彼らを記念するために、オキシシこと沖神介を最後まで書いておきたかった。

菅野▼大作を書かれて随分疲労されたと思うのですが、昔の同僚としても本当に嬉しいです。少なくとも、当今の日本の小説と全く違ったレベルにあるものだと思つて、広く多くの読者に読んでほしいです。単行本がいずれ出るでしょうが、著者の柴田翔のためばかりでなく、現在と未来の日本文学のために期待したいと思つています。

柴田▼そう言っていただと、本当に嬉しいを通り越します。そういうふうに通らえたとつていうのは……。

菅野▼それは「読んでもらえる」んじゃないで「読ませる」力があるということですよ。単行本化の予定はおありなのでしょう。

柴田▼ええ、細部の直しは終えたので、一年半、せかさず待つてくれた「季刊文科」の鳥影社から、そんなに遅れずに出るだろうと思います。今は装幀をやっているところです。

菅野▼楽しみです。今日はありがとうございました。

柴田▼ありがとうございました。

（2017年1月21日 世田谷美術館応接室にて）

*（註1）沖浦和光（1927-2015年）社会学者・民俗学者、桃山学院大学名誉教授。漂泊民や被差別民などをテーマに研究。著書に『幻の漂泊民サシカ』『旅芸人のいた風景』、共著に野間宏との『日本の聖と賤』など。

*（註2）安東仁兵衛（1927-1998年）社会運動家・評論家。東大での学生運動に活躍した全学連第一世代。

資料受贈報告

2016年7月1日（2017年1月31日）

▼阿部弘一様からフランス・ボンジュ資料 茉莉デビイ様から青山光二資料

▼阿部堅磐楼 伊丹啓子様 伊丹三樹彦様 井上隆史様 網谷幸二様 久保田裕子様 坂本宮尾様 鈴木芳雄様 田尻芳樹様 津金孝邦様 津村節子様 戸村雅子様 服部孝男様 福田大輔様 村田馨様 安水稔和様 山川とおる様 山口博哉様 山中剛史様 山本敏倅様 山本幸久様

▼志賀直吉様 志賀直哉著作権管理代表者志賀道哉様

▼NHK放送博物館 青森県近代文学館 尼崎市総合文化センター 一茶記念館 井上靖記念文化財団 射水市大島絵本館 岩波書店 映像産業振興機構 大同信研究会 小田原市経済部観光課 学習院大学史料館 かしま近代文学館・メルヘン館 神奈川近代文学館 紙の博物館 現代文学史研究所 駒沢大学神文化歴史博物館 さいたま文学館 埼玉県教育庁生涯学習文化財課 坂の上の雲ミュージアム 佐佐木信綱研究会 司馬遼太郎記念館 石神井公園ふるさと文化館 集英社 新俳句人連盟 杉並区立郷土博物館 鈴鹿市文化スポーツ部文化財課 田井安雲の歌碑建立有志の会 高島華胄大正ロマン館 田原市博物館 たまし地域文化財団 田山花袋記念文学館 地中海社 調布市武蔵小路実篤記念館 鶴岡市立藤沢周平記念館 東京国立近代美術館フィルムセンター 東京都教育庁地域教育支援部 東京都歴史文化財団 中原中也記念館 日本歌人クラブ 日本児童ペンクラブ 野村胡堂・あらえびす記念館 俳人協会 白山市観光文化部文化振興課 馬の博物館 春吉書房 姫路文学館 「ふくい風花随筆文学賞」実行委員会 福岡市文学館 文京ふるさと歴史館 前橋文学館 町田市民文学館ことばらんど 町田市立博物館 松山市立子規記念博物館 宮沢賢治学会イーハートブセンター 武蔵野美術大学美術館・図書館 やまなし文学賞実行委員会 与謝野晶子倶楽部 リクルートホールディングス 早稲田大学會津八一記念博物館

▼「あけび」宇宙風「海」「海紅」「がいこつ亭」「街道」「風花」「かねこと」「寒雷」「橄欖」「くさきく」「九品仏川柳会句会報」「群系」「g.u.i」「鴻」「心の花」「埼玉文学」「山河」「山暦」「春耕」「春燈」「正午」「星雲」「川柳研究」「双鷲」「蠶」「短歌人」「丹青」「地中海」「飛火」「白」「プチ★モンド」「麓」「文芸思潮」「本のPacking」「窓」「遊牧」「ゆく春」「ランブル」「りんごの木」「檸檬」の各誌ほかより資料のご寄贈、ご協力いただきました。ありがとうございます。（五十首順、団体名敬称略）

2. 連続講座「夢と綺想の球体 澁澤龍彦」

2017年秋に開催する企画展「澁澤龍彦 ドラコニアの地平」のプレイベントとして、各界の論者が多彩な切り口からその魅力を語る連続講座を開催しました。

会場：世田谷美術館 講堂

協力：世田谷美術館

2月4日(土) 巖谷國士(仏文学者)
「澁澤龍彦の宇宙誌」

2月18日(土) 酒井忠康(世田谷美術館館長)
「澁澤龍彦の想像の画廊」

2月25日(土) 中沢けい(作家)
「澁澤龍彦と70年代の高校生」



2. 連続講座「夢と綺想の球体 澁澤龍彦」 2月4日(土) 巖谷國士「澁澤龍彦の宇宙誌」



3. 当館所蔵品の展示 ① 福井県ふるさと文学館 「文学からくり箱展 ～ムットーニの世界～」



3. 当館所蔵品の展示 ② 山梨県立文学館 「北杜夫展 ユーモアがあるのは人間だけです」



3. 当館所蔵品の展示 ③ 新潟市 會津八一記念館 會津八一没後60年 小林正樹生誕100年 企画展「小林正樹と會津八一」



4. 企画、協力の展覧会 「上橋菜穂子とく精霊の守り人」展」 かがしま近代文学館



4. 企画、協力の展覧会 「ミロコマチコ いきものたちの音がきこえる」 京都府 美術館「えき」KYOTO

3. 当館所蔵品の展示

① 福井県ふるさと文学館

「文学からくり箱展 ～ムットーニの世界～」

10月15日(土)～12月18日(日)

当館所蔵のムットーニ作品7点を出品しました。

「中野重治 ふる里への思い、そして闘い」

10月15日(土)～12月18日(日)

当館所蔵の中野重治原稿を出品しました。

② 山梨県立文学館

「北杜夫展 ユーモアがあるのは人間だけです」

9月17日(土)～11月23日(水・祝)

当館所蔵の北杜夫原稿、書簡、愛用品等を出品しました。

③ 新潟市 會津八一記念館

會津八一没後60年 小林正樹生誕100年

企画展「小林正樹と會津八一」

10月7日(金)～12月11日(日)

当館所蔵の小林正樹関連資料を出品しました。

4. 企画、協力の展覧会

当館が企画、協力した展覧会が各地で開催されました。

「上橋菜穂子とく精霊の守り人」展」

9月24日(土)～11月20日(日)

会場：駿府博物館

1月20日(金)～2月19日(日)

会場：かがしま近代文学館

「ミロコマチコ いきものたちの音がきこえる」

12月1日(木)～12月25日(日)

会場：京都府 美術館「えき」KYOTO

「岡崎京子展 戦場のガールズ・ライフ」

12月3日(土)～1月22日(日)

会場：三菱地所アルティウム

「浦沢直樹展 描いて描いて描きまくる 大阪の巻」

11月26日(土)～1月25日(水)

会場：大阪南港 ATC

1. 「どこでも文学館」の活動

① ワークショップ「超ショートショート講座」

11月20日(日)

会場：奥沢区民センター

講師：田丸雅智(作家)

誰でも楽しく短い物語を書けるようになる大好評の講座。

—— 連想した言葉を組み合わせて、不思議な言葉を作る。

—— 不思議な言葉から想像を広げ、思いつくことを書く。

—— 思いついたことをつなげて、短い物語にまとめる。

3つのステップでみんなの奇想天外な超ショートショート小説が完成。作品は奥沢区民センターで展示しました。

② 芦花小学校+大竹英洋ワークショップ

11月21日(月)・22日(火)・24日(木)

講師：大竹英洋(写真家)

6回目を迎えた、写真家・大竹英洋さんと共に身近な自然を見つめなおす「写真」と「ことば」によるワークショップを開催しました。4年生約150名が、PDS(Plan Do See)の流れに沿った3日間のプログラムを通して、自分の作品を作りました。

②-1 1日目：考える日。自然についてのお話と撮影方法を聞いて、想像を膨らませました。

②-2 2日目：行う日。公園での撮影会。写真家気分で見近な自然を発見しました。

②-3 3日目：振り返る日。撮影した写真にタイトルをつけ、オリジナル作品の完成。みんなで鑑賞しながら講評を行いました。

③ ワークショップ「ワン・ミニット・ムービー ～冒険物語を作ろう!～」

1月29日(日)

会場：池尻まちづくりセンター

講師：北阪昌人(脚本家)

本田友美(教育と探究社)

協力：一般社団法人日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム、株式会社教育と探究社

タブレットPCを活用して1分間の短編映像作品をつくりあげるプログラム。子どもたちが感性と創造性をフルに働かせて、身の回りにあるものを主人公に見立てた冒険物語を自由に紡ぎ出しました。17名の「監督」たちの作品は、世田谷文学館ホームページからご覧いただけます。

④出張展示

世田谷区立小・中学校、世田谷区立中央図書館、群馬県川場村・世田谷区民健康村ふじやまビレジ・なかのビレジのロビーで展示活動を行いました。

パネル展示「アルプスの少女ハイジ」

9月17日(土)～4月30日(日) ＊予定

会場：世田谷区民健康村

ふじやまビレジ・なかのビレジ

パネル展示「クマのプーさん魔法の森へ」

12月23日(金・祝)～3月29日(水)

会場：世田谷区立中央図書館



①



①



①



②-1



②-3



③



③

特集
世田谷文学館全館改修工事と
リオープン

I

改修工事休館中の 活動報告

2017年4月末、世田谷文学館は半年間の設備改修を終えてリオープンいたします。ここでは改修工事期間における当館の活動をご紹介します。

2016年9月16日(金)～2017年4月21日(金)



②-2



③

子どものためのエリア

ベビー&キッズエリアには、絵本や児童文学を中心に、子どもも楽しめる本を描えています。また、子どもたちが安全に遊べるプレイスペースもあります。

ベビーケア設備

ベビー&キッズエリアには、ゆったりとした空間の授乳室があります。また、1階多目的トイレにはオムツ替えシートを設置しています。小さなお子さま連れでも安心してお出かけください。

※イメージ図。
実際とは異なる場合があります。

収蔵品のスポット展示や多彩なイベントも

書棚に並ぶ本に関連した、ライブラリー内での収蔵品のスポット展示も、今後は予定しています。また、おはなし会やトークイベント、企画展と連動した小さな古本市なども開催予定です。ミュージアムショップや喫茶室とも連携しながら、ライブラリーの室内にとどまらずアクティブに活動を展開していきます。

川場村の木製家具

子どものためのイスやテーブル、書棚、カウンターなど、新たに製作する家具什器類は、世田谷区と縁組協定を結ぶ群馬県川場村の木材を使用しています。天然木本来の風合いをもつ無垢材です。

2つの空間

“ほんとう”の室内は、中央に置かれた書棚がパーテーションとなり、空間が2つに分けられています。手前はメインのライブラリーエリア、奥は子どもが主役のベビー&キッズエリアです。

企画性のある本棚

書棚の本は定期的に入れ替えていく予定です。世田谷ゆかりの文学者や作品に関する本はもちろんのこと、各分野のプロフェッショナルや作家が薦める本、企画展と連動した特集コーナーなど、企画性のある書棚づくりを行っていきます。

また、美術、デザイン、写真、映画、音楽など、文学と近接する諸分野にも目配りし、ジャンル横断的に文化・芸術にかかわる本を紹介していきます。時代を映す鏡としての、雑誌のバックナンバーコーナーにもご注目ください。

特集
世田谷文学館全館改修工事と
リオープン

II

ライブラリーについて

新ライブラリーは本との出会いの場
子どものためのエリアも新設して
リニューアル

このたびの改修工事にもない、ライブラリー（図書室）の空間と機能をリニューアルすることになりました。

これまでライブラリーでは、主に調査・研究を目的とする方々にむけたサービスを中心に行ってきたが、これからはより多くの方々にむけて、このスペースが書物との新たな出会いの場となるよう、内容の充実を図っていきます。

また、地域の状況に目を転ずれば、世田谷区では過去5年間、9歳以下の児童の人口が、毎年1000人以上のペースで増加しています。こうした状況もふまえ、リニューアル後は乳幼児を中心とした、子どもたちのためのエリアを新設し、親子で楽しめる空間づくりを進めます。

この記事を作成している時点（2017年2月）では、まだ工事が完了しておらず、果たしてどこまで実現できるか未知数の部分もありますが、ここでは現在計画しているリノベーションのポイントを紹介します。

なお、収蔵資料の閲覧については、3階に新たに設ける閲覧室にて、ご利用いただけるようになります。

所在地 世田谷文学館1階
開室時間 10時～18時

休室日 毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は開室し、翌平日休室）、年末年始、室内整備期間

* ライブラリーのご利用は無料です。

* 図書・雑誌の館外貸出は行っておりません。

* 収蔵資料の閲覧については事前申込が必要なお場合もございます。あらかじめお問合せください。

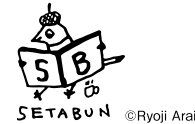
NEW! ライブラリー

hon-to-wa

ほんとう

4月22日(土) オープン

※企画展・コレクション展は4月29日(土・祝)スタートです。ご注意ください。



新たに生まれる空間は、従来のライブラリーのあり方とは大きく異なります。

子ども達の遊ぶ声が聴こえてきますし、書棚の本も既存の分類法で整然と並んでいたりはしません。

静かで落ち着いた空間というよりも、活き活きとした賑やかな空間です。

図書室というよりも、むしろ書店に近い印象を抱かれるかもしれません。

そこで、新たなスペースに屋号のような愛称をつけました。

“ほんとう”といいます。

「本と和」、「本^{とわ}永久」、「本とは？」など、いくつかの意味を重ねあわせた名前です。

本があることで人が集い、交流する場になること、

幅広い世代にむけて、本との出会いと多様な楽しみ方を提供する場になることを、

“ほんとう”は目指しています。

「読む・観る」の両面からお楽しみください。

文学者の美意識や趣味を、画家による文学と美術との架橋を、当館秘蔵のコレクションを通して

文学者の美意識や趣味を、画家による文学と美術との架橋を、当館秘蔵のコレクションを通して



村山槐多《二少年図》1914年 紙・水彩



竹中英太郎《『鬼火』挿絵原画》1935年 紙・墨ほか

会期:4月29日(土・祝)～9月18日(月・祝)

※なお、一部作品は会期中に展示替えを行います。

会場:世田谷文学館 1階展示室

主催:公益財団法人せたがや文化財団 世田谷文学館

後援:世田谷区、世田谷区教育委員会

観覧料:一般200(160)円、大学・高校生150(120)円、小・中学生、65歳以上・障害者手帳をお持ちの方100(80)円

※小・中学生は、毎週土日祝、夏休み期間および「山へ!展」会期中、観覧無料。

※4月29日(土・祝)は、開館記念のため観覧無料。

※6月3日(土)は地域祭事「下町まつり」のため観覧無料。

※5月5日(金・祝)、7月21日(金)は、満65歳以上の方は観覧無料。

※8月11日(金・祝)は、「山の日」により観覧無料。

そして、想像力に優れた古今東西の詩人、文学者の多くは書画を愛好し、自らも絵筆を揮いました。一方で文学作品の精髓を汲んだ画家が傑出した画を成し、詩歌や文章でも才を開けることは少なくありません。

今回のコレクション展では、毛筆の詩歌句、室や書斎に掛けた敬愛する文学者や友人の揮毫、文房具など、文学者による、または文学者にまつわる書画とゆかりの品、そして詩や小説、児童文学を彩る挿絵やデザイン、近代を代表する表現芸術である映画を支える美術の仕事をご紹介します。



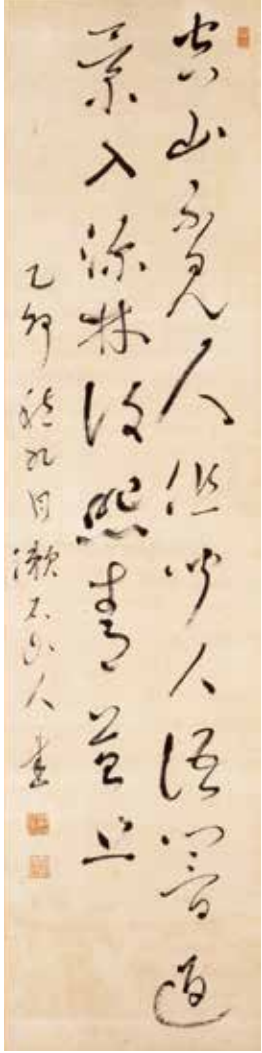
松野一夫《『黒死館殺人事件』挿絵原画》1934年 紙・墨ほか



白井喬二《鮎翔ねる》1979年 色紙・墨・顔料



夏目漱石愛用の荷絵短冊箱〔江戸～明治〕 木製・漆



夏目漱石墨書「唐人之句空山不見人」1915年 紙墨

コレクションにみる
文学を彩る書画の魅力
ut pictura poesis
——詩は絵のように

古代ローマの詩人ホラティウスの『詩論』の一節「ut pictura poesis」詩は絵のように」に端を発し、詩と絵を「姉妹芸術」とみる「画文一如」「画文共鳴」の芸術観は、長い年月を経た今も共感をもって受け入れられています。現在では、文学と美術の共鳴と言ってもよいでしょう。

古来より神聖な空間や経典などで尊い言葉の

莊嚴を担い、教えや物語を絵解きで視覚化して

伝えた絵画や装飾美術は、近代以降も挿図、挿

絵、装幀などで言葉や文学と深く結びついてきま

した。毛筆の運びと七彩に響えられる墨色によ

り、文字は語意にととまらず絵は極彩色に劣ら

ない無碍の表現を誇る東洋の書画でも、詩句と

絵を一体にして理想郷が描かれました。このよう

に文学と美術、言葉、絵画、装飾は、長きに亘つ

て共に様々な形で人間の営みを豊かにしてきた

のです。

そして、想像力に優れた古今東西の詩人、文学

者の多くは書画を愛好し、自らも絵筆を揮いま

した。一方で文学作品の精髓を汲んだ画家が傑

出した画を成し、詩歌や文章でも才を開ける

ことは少なくありません。

今回のコレクション展では、毛筆の詩歌句、室や

書斎に掛けた敬愛する文学者や友人の揮毫、文

房具など、文学者による、または文学者にまつわ

る書画とゆかりの品、そして詩や小説、児童文学

を彩る挿絵やデザイン、近代を代表する表現芸術

1階エントランス

大きなガラス窓から鯉が見えるエントランスは、ミュージアムショップを拡充します。

1階展示室

コレクション展を行う1階展示室は、空調と照明が一新され、壁もきれいになりました。

2階展示室

企画展を行う2階展示室は、天井配管を隠すルーバーがなくなり空間が広がりました。また床材をすべて張り替えました。

3階事務室

当館を運営する事務職員と学芸員が仕事をするオフィスフロアです。ここも床や壁をスケルトンの状態にして大改修をしました。改修中はここでは業務ができないため、職員たちは遠く離れた場所に仮事務所を設置して仕事をしました。

鯉はどこへ……？

世田谷文学館といえば「鯉」というイメージがあるほど、名物となっているエントランスの鯉たち。工事中は足場が組まれるため、池の中には水はなく、もちろん鯉もいません。鯉たちはどうしているのでしょうか。



特集
世田谷文学館全館改修工事と
リオープン



改修工事の報告

世田谷文学館は開館から20年以上が経過し、電気や空調といった様々な大型設備の更新時期を迎えました。普段から建物大切に使用し、メンテナンスをしてきましたが、この機会に合わせて、一時休館をさせていただき、内装も含めて改修を行いました。



天井や床を剥がし、電気配線や空調などの工事を行いました。また、全ての照明が省エネで長寿命かつ安全性の高いLEDになりました。明るさや色合いを部屋ごとに検討し、配置などにも工夫をしました。これにより居心地のよい鑑賞空間を提供します。



山へ！ to the mountains展

7月15日(土)～9月18日(月・祝)

古今東西、人間は「山」と共に生きてきました。本展では、その過程で生み出されてきたさまざまな「知」と「表現」に注目し、文学を核としながら、芸術学、建築学、地質学、植物学などとの関係性の中で、「山」を学際的、多角的にとらえ直す初の試みとして開催します。展覧会にあわせ、多彩なプログラムも実施します。

[出品予定作家] 深田 久 弥:登山家、作家 | 小島烏水:登山家、随筆家 | 田辺和雄:植物学者、登山家 | 吉阪隆正:建築家、冒険家 | 石川直樹:探検家、写真家 | 田部井 淳 子:登山家 他

※観覧料:16頁をご覧ください。

しぶさわつひこ 澁澤龍彦 ドラコニアの地平

10月7日(土)～12月17日(日)

フランス文学者であると同時に、翻訳、評論、エッセー、小説と多彩な執筆活動を展開した澁澤龍彦(1928-1987)。没後30年を迎える本展では、綺想の作家の創作と足跡をあらたな視点から総覧します。サドをはじめとする異色の文学を出発点とした澁澤は、広大な書物の渉猟から数多くの作品を生みだしました。澁澤独自の文学表現活動を“澁澤スタイル”と位置づけ、代表作『高丘親王航海記』草稿等、原稿や創作メモ類の自筆資料、愛蔵の美術品やオブジェ、和洋の蔵書などから、その背景と博物誌的世界の魅力に迫ります。

また、2017年2月に開催した菅野昭正館長プロデュースによる連続講座「夢と綺想の球体 澁澤龍彦」の後期講座を会期中に行います。

観覧料: 一般 800(640)円/65歳以上、高校・大学生600(480円)/
障害者手帳をお持ちの方400(320円)/小・中学生 300(240)円
※()内は20名以上の団体料金
※10月13日(金)は65歳以上無料

ミロコマチコ いきものたちの音がきこえる

2018年1月20日(土)～4月8日(日)

絵本作家としてのデビュー作『オオカミがとぶひ』(2012)が、日本絵本賞の大賞に輝いたミロコマチコ。その類いまれな色彩感覚と独自の造形表現、豊かな言語感覚によって生み出される作品は、国内外の名だたる絵本賞を受賞してきました。

本展では、大型作品を含む絵画や立体、代表作の絵本原画など、140点以上の作品に最新作を加えて構成し、画家として、絵本作家として、日々創作をつづけるミロコマチコの、“今”を切り取ります。ダイナミックな、ライブ感あふれる展示をお楽しみください。

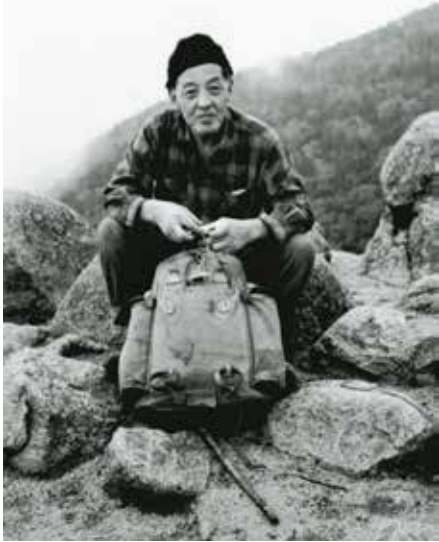
観覧料: 一般 800(640)円/65歳以上、高校・大学生600(480円)/
障害者手帳をお持ちの方400(320円)/中学生以下無料
※()内は20名以上の団体料金
※1月26日(金)は65歳以上無料

第36回 世田谷の書展 世田谷ゆかりの作家たち

2018年1月4日(木)～14日(日)

観覧料: 無料

展覧会関連、せたがや子ども文学館、セタブンマーケットのほか、多彩なイベントも企画しています。詳細はお問い合わせください。



深田久弥 国師岳の頂上で 1964年 ©望月達夫



澁澤龍彦の家の応接間 撮影:原田 寛



《グランドガゼルもまってる》2010年
《ご飯を待つ4匹》2016年

第35回世田谷文学賞 作品募集!

世田谷区(及び区と縁組協定を結ぶ群馬県川場村)に在住・在勤・在学する方々と、世田谷文学館友会の会会員を対象として、区民の文芸創作活動を支援する「世田谷文学賞」を隔年で開催しています。
(募集部門:詩、短歌、俳句、川柳、随筆)
2017年度の募集は9月1日～11日(予定)。
詳細は5月～ホームページ・チラシで告知しますをご覧ください。

ムットーニ・パラダイス

4月29日(土・祝)～6月25日(日)

自動からくり人形作家「ムットーニ」こと武藤政彦^{むとうまさはこ}。人形と装置の多様な動きに合わせ、音楽、光、本人の語りなどが重なり合いながら物語や世界観が表現されるその作品は、他に類のないアート作品として多くの人びとを魅了しています。

1987年に初めてののからくり人形作品《天国と地獄》を発表し、今年でキャリア30年を迎えたムットーニの集大成となる展覧会です。近年の代表作《ジャングル・パラダイス》や《蜘蛛の糸》に至るまで、ムットーニは小さな箱で人形が一回りする数分間の円環運動の中に、主人公が悩みや苦しみのない世界(Paradise=楽園・天国)を希求しながら再び現実の世界へと帰還していく普遍的な物語を閉じ込めてきました。

本展では、これまでの代表作のほか初期の油絵画や創作過程のラフスケッチ、そして初公開となる最新作《ヘル・パラダイス》など多彩な内容で、ムットーニの作品世界をご紹介します。

※観覧料:16頁をご覧ください。

[関連イベント]

ギャラリートーク:

ムットーニ本人が作品をご案内します。
会期中の土・日曜日

14時/16時30分(所要時間約40分)
事前申込不要(ただし展覧会観覧料がかかります)

※観覧者多数の場合は入場を制限させていただきます。
※上演内容は回により異なる場合があります。

スペシャルツアー:

ムットーニによる作品のスペシャル上演会です。
5月6日(土)/5月20日(土)/6月17日(土)
各日18時～(所要時間約60分)
定員:各回抽選40名
料金:無料(ただし展覧会観覧料がかかります)

申込方法:

当館HP(<http://www.setabun.or.jp/>)のイベント申し込みフォームからお申し込みください。

露天商・楽園:

ムットーニ手作りの小物を販売する一日限りの屋台です。

6月17日(土)11時～(10時より整理券配布。売り切れ次第終了)
会場:ロビー
事前申込不要



《ジャングル・パラダイス》2013年



《天国と地獄》1987年
初めてののからくり人形作品(ゼンマイ式)



《猫町》(萩原明太郎「猫町」より)1994年 当館蔵



《摩天楼》1999年



《蜘蛛の糸》(芥川龍之介「蜘蛛の糸」より)2016年

企画展



ムットーニ・パラダイス

4月29日(土・祝)
～ 6月25日(日)
2階展示室

観覧料:
一般800(640)円
65歳以上・大学・高校生
600(480)円
小・中学生300(240)円
障害者手帳をお持ちの方
400(320)円
*()内は20名以上の団体割引

《摩天楼》1999年

山へ! to the mountains 展

7月15日(土)～9月18日(月・祝)
2階展示室

観覧料:
一般800(640)円
65歳以上・大学・高校生
600(480)円
障害者手帳をお持ちの方
400(320)円
中学生以下無料
*()内は20名以上の
団体割引
※8月11日(金・祝)の
「山の日」は無料



『日本百名山』新潮社 1964年



企画展	ムットーニ・パラダイス 4月29日(土・祝)～6月25日(日)	山へ! to the mountains 展 7月15日(土)～9月18日(月・祝)
全館改修工事休館 4月21日(金)まで	4月	5月
コレクション展	6月	7月
	8月	

コレクション展

コレクションにみる文学を彩る書画の魅力
ut pictura poesis — 詩は絵のように

4月29日(土・祝)～9月18日(月・祝)
1階展示室



観覧料:
一般200(160)円
大学・高校生150(120)円
小・中学生、65歳以上・障害者手帳をお持ちの方100(80)円
※小・中学生は、毎週土日祝、夏休み期間および「山へ!展」会期中は
無料
*()内は20名以上の団体料金

休館日:
4月21日(金)まで。以降は毎週月曜日(ただし月曜日が休日の場合には
開館し、翌日休館)

開館時間:
10時～18時
(ただし観覧入場は
17時30分まで)
無料観覧日:
開館記念4月29日(土・祝)
地域祭事「下町まつり」
6月3日(土)
山の日 8月11日(金・祝)
[65歳以上]シニアデー
5月5日(金・祝)、
7月21日(金)

交通案内
京王線「芦花公園」駅南口より徒歩5分 / 小田急線「千歳船橋」駅より
京王バス(千歳島山駅行)利用「芦花恒春園」下車徒歩5分

公益財団法人せたがや文化財団

世田谷文学館 SETAGAYA LITERARY MUSEUM

〒157-0062 東京都世田谷区南島山1-10-10
Tel. 03-5374-9111 Fax. 03-5374-9120
ホームページ <http://www.setabun.or.jp/>



せたがや文化財団の
催し物

■世田谷美術館

[Tel. 03-3415-6011]

- エリック・カール展 The Art of Eric Carle
4月22日(土)～7月2日(日)



エリック・カール『はらぺこあおむし』デザイン原画
制作年不詳 エリック・カール絵本美術館 © Eric Carle

ミュージアム コレクションI

- それぞれのふたり 淀井彩子と淀井敏夫
4月18日(火)～7月2日(日)



淀井彩子《土地の名・土地の色・土地の時間2015-3》
2015年

■世田谷美術館分館 向井潤吉アトリエ館

[Tel. 03-5450-9581]

- 向井潤吉1910's-1950's 民家への道
4月1日(土)～7月23日(日)

■世田谷美術館分館 清川泰次記念ギャラリー

[Tel. 03-3416-1202]

- 清川泰次が写したパリ
4月1日(土)～7月23日(日)

■世田谷美術館分館 宮本三郎記念美術館

[Tel. 03-5483-3836]

- 宮本三郎の描く身体
THE BODY in Saburo Miyamoto's Art
4月1日(土)～7月23日(日)

■世田谷文化生活情報センター

世田谷パブリックシアター

[Tel. 03-5432-1526]

世田谷パブリックシアター開場20周年記念公演

●勅使川原三郎

「ABSOLUTE ZERO 絶対零度 2017」
構成・振付・美術・照明:勅使川原三郎
出演:勅使川原三郎 佐東利穂子 ほか
公演日程:6月1日(木)～6月4日(日)
会場:世田谷パブリックシアター

●『子午線の祀り』

作:木下順二
演出:野村萬斎
音楽:武満 徹
出演:野村萬斎 成河 河原崎國太郎
今井朋彦
村田雄浩
若村麻由美 ほか
公演日程:7月
会場:世田谷パブリックシアター



■世田谷文化生活情報センター

生活工房 [Tel. 03-5432-1543]

●真田岳彦

ディレクション/
衣服・祝いのカタチ
「赤をめぐる旅」展
4月5日(水)～
5月14日(日)
会場:生活工房
ギャラリー



弁柄染芋麻糸

●DAYS JAPAN 写真展2017 地球の上に

生きる「世界の未来をつくるために」
5月20日(土)～6月11日(日) ※月曜休み
会場:生活工房ギャラリー、ワークショップ
ルームB

■世田谷文化生活情報センター

音楽事業部 [Tel. 03-5432-1535]

- 室内楽シリーズ 古部賢一&鈴木大介
ーオーボエとギターのおしゃれな時間ー
出演:古部賢一(オーボエ)、鈴木大介(ギター)
6月18日(日) 15:00開演
会場:成城ホール

古部賢一 ©土居政則

鈴木大介

